

能

村

滑

研

句集

三

翔



## 滑翔のちからを貯めて鷹渡る

鷹と鷲とはどう区別するのか。分け方は便宜的で中形、小形のものを鷹という。〈鷹渡る〉は秋の季語で、冬に多く見かける鳥だ。実際に鷹が北方から渡って来るのは滅多に見られない。けれど想像するのは容易で、〈滑翔〉ははばたきを止めて滑るように空を飛ぶこと。上昇気流を利用しての滑翔は〈ちから〉を蓄えているときで、転じて内に秘めた闘志を示すことばだ。

第一章 真北風

平成九年・十年

秋  
瀑  
の  
壺  
に  
収  
ま  
る  
水  
の  
列

筆  
の  
穂  
を  
嚙  
ん  
で  
お  
ろ  
せ  
り  
涼  
新  
た

秋澄めり心はすでに北を指す

真つ白な狼藉ぶりの葛の谷

清洲橋

鯨潮に橋の曲線やさしかり

いつよりか父の手が冷え稲の花

蝗煮の仔細は言はず  
振舞へり

悼・上田五千石氏

とこしなへみるみる  
小さき渡り鳥

温  
も  
り  
は  
色  
な  
き  
風  
に  
忽  
と  
消  
ゆ

支  
度  
な  
き  
死  
な  
ど  
も  
あ  
ら  
む  
雁  
渡  
し

第二章 舵輪 平成十年

桐咲くや父と違へる本籍地

更衣北信五岳の名を誦す

ボランティア始めるための夏帽子

梅雨いとま父同道の伊勢詣

濁流に神の威ありて梅雨木立

梅雨空に凧ぎ時ありて遷宮地

いしぶみの紙型を置き夏座敷

寝不足にやや遠ざけし百合の壺

感嘆詞ばかりで喋る立泳ぎ

炎帝の掌より出帆す

第三章  
滑翔  
平成十一年

九十九里・太東崎

遠  
篝  
目  
指  
し  
て  
初  
日  
岬  
な  
り

初  
日  
待  
つ  
国  
見  
心  
地  
の  
岬  
に  
て

初漁の転舵清しき勢ひかな

冬櫻真向かふ位置に家長の座

美緒、成人

桜いろして成人の日の吾子ならむ

読初は朱の装幀の一書かな

三 寒 四 温 老 の 機 嫌 を 窺 へ り

鷹 匠 が 雲 の 速 さ を 読 ん で を り

和布刈神事 四句

楳立てて火勢ととのふ和布刈の火

和布刈炬火の猛けて向き合ふ夜の海峡

第四章  
展帆  
平成十二年

鮮明な初夢にして怖きかな

火酒もて咽を焼きたる厄落し

潮の香がして探梅の行き戻り

能「道成寺」

春はやち急の舞へと変じをり

国東両子寺に登四郎句碑建立

開眼の祝ぎ降らしてふ春の雪

淡雪や父眦にあつきもの

彫り深き筆勢なぞる雪明り

眉の濃し国東人はあたたかし

六郷の錐に集めし春の道

夜に映えて紫烟草舎の春障子

第五章 大節 平成十三年

引く波の音なきちから初明り

凍星のかがやき過ぎの不安かな

水鳥に似てあらたまの肌着替

無頼さが少し足らざる初鏡

捏ねられて祈るかたちの素焼雛

木の橋をしなやかに来し恋の猫

人声に似たるチェロの音春深し

梅日和採寸の腕宙にあり

大寺の屋根替へにして祭めく

東慶寺

十二単かけこみ寺に咲き伏して

第六章  
朴一花  
平成十四年

風神がわたるたかむら能始

淑氣満つうしほ寔れの礁かな

祝 箸 名 を 書 く 役 の 家 長 継 ぎ

鏡 餅 女 系 家 族 の 真 中 に て

分水嶺頭上はことに星冴ゆる

銀山は雪の底ひに過客たり

雪吊の雪なきままに締めまりけり

オカリナが縄文を呼ぶ梅月夜

夭折の耕二浩一余寒雲

声があり父亡き年の涅槃図に

滑翔のちからを貯めて鷹渡る



句集 滑翔（かつしょう）

発行二〇〇四年一月二〇日

著者 能村研三◎

発行人 山岡喜美子

発行 ふうらんす堂 〒182-0002 東京都調布市仙川町一―九―六一―102

電話〇三―三三三二六―九〇六一 Fax〇三―三三三二六―六九一九

ホームページ <http://www.ifnet.or.jp/fragie> E-mail [fragie@apple.ifnet.or.jp](mailto:fragie@apple.ifnet.or.jp)

装丁 君嶋真理子

印刷所 株式会社ト―ヨ―社

製本所 有限会社並木製本

用紙 太平紙業株式会社

定価 本体二八〇〇円十税

ISBN4-89402-615-5 C0092 ¥2800E